

柿右衛門（かきえもん）の歴史と理念

柿右衛門窯の歴史は約 380 年前まで遡る。1640 年代に酒井田喜三右衛門（さかいだきそうえもん）（1615～1653）が日本で初めて上絵を施した磁器を見事完成させたことがきっかけである。色絵（いろえ）、地元では赤絵（あかえ）と呼ばれるこの技術は、釉薬をかけて一度焼き上げた磁器に鮮やかな赤・青・緑・黄の上絵具で絵付けを行うものである。喜三右衛門は柿右衛門の名を与えられ、この世襲制の名前は現当主である十五代柿右衛門（1968 年生まれ）まで受け継がれてきた。そして、この一族が作る磁器の様式は「柿右衛門様式」や「柿右衛門」の名で知られるようになった。この柿右衛門という名前は、初代柿右衛門が persimmon（日本語で柿の意）の色と風合いを見事に表現したことに由来すると言われている。

1650 年代後半、柿右衛門窯は欧州への輸出用磁器の生産を始めた。柿右衛門磁器は、当時有田で作られていた他の様式と比べて高価な贅沢品であった。その品質の高さや美しさが評判を呼び、欧州や国内の宮殿や城で人気を博した。1600 年代終わりまで、柿右衛門様式の磁器は有田の多くの窯元で作られ、さらには、英国、ドイツ、フランスなど欧州各国の窯元でも作られた。ただし、濁手（にごしで）磁器の作り方を知っていたのは柿右衛門一族だけである。濁手磁器とは乳白色をした磁器のことで、その作り方は門外不出であり、柿右衛門当主だけが知っていた。

1700 年代に入ると柿右衛門様式の磁器の人気が下火になったため、柿右衛門窯は、金襴でアクセントを付けた色鮮やかな上絵様式・金襴手（きんらんて）磁器の生産に切り替えた。1950 年代に十二代柿右衛門（1878～1963）とその息子である十三代柿右衛門（1906～1982）が復活させるまで、濁手技術は失われてしまったと考えられていた。1971 年、濁手は国の重要無形文化財に指定され、2001 年には十四代柿右衛門（1934～2013）が人間国宝に認定された。2014 年には、その息子である十五代柿右衛門が跡を継いだ。

十五代柿右衛門は約 40 人の職人を統括して指示を出すとともに、現在窯で手がけているデザインすべてを自ら作っている。作品の多くは先代たちが手がけた昔のデザインに着想を得たものだが、馴染みのあるモチーフを表現するための新しい方法や、海外とのデザインの違いを学ぶため、他の職人の作品を研究するということも行っている。およそ 400 年に及ぶ一族の歴史を守りながら、流行の変化を考慮し、伝統を守りつつ独創性も高めていけるような方向に窯を導いていくにちがいない。